

○岸本 幸臣\* 趙 穎\*\* 宮崎 陽子\*\*

(\*大阪教育大学 \*\*大阪教育大学・院)

**【研究目的】**戦後の生活変革の大きな課題の一つに、住宅の洋風化と椅子式化、公私室型平面の普及があった。しかし、現実の住まい方の中では、住宅の構造的洋風化と起居様式の椅子座化も、また公私室型構成も我が国特有の進展を辿ったといえる。本研究はこうした課題を起居様式の視点から捉え、今後の平面計画の課題を探ろうとしたものである。

**【研究方法】**阪神間の大学・短大生を対象に、自宅の平面図の採取と住み方や評価についての意識調査を実施した。有効回収件数 102 で、調査期間は平成 11 年 10 月～12 月である。

**【考察結果】(調査対象の基本属性)** 調査対象学生の家族型は核家族が 7 割弱と最頻値を占め次いで 3 世代が多い。また世代と子どもの性別構成から家族タイプを 6 類型すると、2 世代(異性子)が約 4 割と多い。平均世帯人員は 4.75 人で平均世帯年齢は 50.4 才である。**(住宅条件)** 戸建が 75%と多く平均室数も 5.8 室で 6 室以上に過半が集まり居住水準はかなり高い。家族人数と家族周期からえた必要部屋数と実部屋数から「ゆとり度」を把握すると、ゆとり度 1 室以上が 7 割強に達している。**(住宅の和室率)** 全居室数に対する和室率が 50%を越える住宅が 45.2%みられる。ゆとり度がマイナス値になると和室率が急上昇している。**(居室の和洋構成)** 居室の和洋と家具構成では、「洋室+洋家具」の率は食事室が最も多く 8 割強、次に団らん室と勉強部屋が各々 6 割弱と高い。主寝室は「和室+和家具」が 6 割強で逆転している。**(LDK 構成)** プラン上は一体型が約 5 割と最も多く K 分離型が 4 割に増加している。ゆとり度別では、ゆとり度が低下すると一体型が増加し、マイナス値になると L 分離型が増えている。